



城東図書館 2023年10月20日～11月15日実施

まちのひと 猪田 みゆきさんの紹介本リスト

会社員 城東区ゆめ～まち～未来会議

ウクライナ戦争は世界をどう変えたか 「独裁者の論理」と試される「日本の論理」	豊島 晋作／著	KADOKAWA
<p>ウクライナ戦争が始まる数か月前から海外の文献等を根拠に動画サービスで指摘していたアナウンサーである著者。この本は動画で発信していた内容に加筆してジャーナリストとして日本に警鐘を促す国際政治の変化を書いている内容です。</p> <p>まず、内容が難しい歴史的な話や地政学的リスクなどを不慣れな人でも理解しやすい言葉で説明し、だからこのような状況になっている、とイメージできる文章でロシアとウクライナの関係性を紹介し、日本近海のリスクについても考えられるシナリオを指摘し、海外の戦争は他人事ではないのだ。</p> <p>そのメッセージ性もさることながら本が苦手だと言って全く本を読まない夫がこの本だけは三回も読んだ、そのことが私にとっては物凄く印象的でした。それほど面白い本、ためになる本なのか、ぜひその目で確認してみてください。</p>		
ビジネスエリートになるための 投資家の思考法	奥野 一成／著	ダイヤモンド社
<p>皆さんは、投資と聞くとどんなイメージをしますか？『ギャンブル』、『投機』、あるいはなんだかリスクが高い危ないもの、それとも不労所得、などでしょうか？私もこの本を読むまではお金に余裕があって一部の人しかできないものだと思っていました。</p> <p>この本では『投資』と『投機』は異なるもの若いころには株式などに投資するより、自分自身という資産に投資をし、自分という価値を高めること。それとともに株主として成長する企業に投資し自分の代わりに働いてもらう、という思考を身につけることが大切だと書かれています。</p> <p>自分の代わりに働いてもらうのだから、数日、数か月などで株を売ったり買ったりするのではなく、できれば永遠に近い何十年と株を保有したい、と考える企業の株を買うことが投資である、というのです。まずは、読書や何かを経験するという自己投資から挑戦しよう！とこの本を読んで思ってもらえたら投資家の一歩かもしれませんね。</p>		
能楽源流考	能勢 朝次／著	岩波書店
<p>この本は昭和初期に書かれた絶版本です。おそらく図書館では展示が難しい、と思いつつ紹介します。</p> <p>なぜそんなものを紹介するのか。答えは私が榎並猿楽という存在を知った本だからです。能楽研究をする方はどこかで引用をする能勢先生の本は、能で有名な観阿弥・世阿弥親子をはじめ様々な能楽の研究が記され、1000頁を超える大変分厚い一冊です。国会図書館のデジタルアーカイブで欠損箇所以外は無料で読めます。日本語が少し難解なのでなかなか読み進めるのは難しいですが、榎並猿楽とはどこを拠点にし、いつの時代まで活躍していたのかをこの時代にはここまでわかっていたのか、と言ったことがよくわかります。</p> <p>私はこの本を読んで城東区に残された伝統芸能の名残に興味を持ち、会社員をしながら人生2度目の大学生活の卒業論文で研究をしようと決めました。おかげでゆめまちの活動の一環である伝統芸能事業に携わることができました。なので、私にとって人生に大変影響を与えた一冊として紹介したかったのです。</p>		
木曜日にはココアを	青山 美智子／著	宝島社
<p>私がこの本に出会ったのは鶴見区にある「正和堂書店」のSNSで話題のブックカバーが欲しい、と訪れた時です。その時は心身が長引く感染症、仕事やプライベートの問題と様々なことが重なって故障していました。読書が趣味だったのに数か月以上本が読めないのに、ブックカバーに釣られて(文字通り本当にそんな心境でした)本屋に行ったものの何を読めばいいのかわからず、たまたま手に取った一冊でした。</p> <p>しかし、中身は連作短編という一話一話主人公の変わる短編ですが、設定は繋がっている作品でした。今まで小説は完全に独立した短編か、長編しか読んでいなかった私にはこんな作品の書き方があったのか、と今更ながらの気付きと作品自体の温かみのある言葉たちがタイトルのココアのようにじんわりゆっくりと心に沁みました。続巻も文庫になったのでぜひ読んでみてください。</p>		
神様当番	青山 美智子 / 著	宝島社
<p>この本を紹介しなければ、と半ば使命感のようなものに駆られたのは、文庫本の巻末にある表紙を制作されたミニチュア作家さんと著者の対談を読んだことがきっかけです。とある時間のとあるバス停に居た人たちに次々と表れる神様当番という文字、そして神様と名乗る存在が当番と決めた人にお祈りを叶えるまで文字は消えず、自分も傍にいるという内容の連作短編。</p> <p>その神様のイメージが吉本新喜劇の茂造じいさんだと著者はいうのです。確かに、神様って名乗っているのに着ている服装は、ジャージ、頭はもじゃもじゃ。しかも、本の表紙をよく見ると茂造じいさんの頭みたいな太陽とジャージそっくりの山！</p> <p>そのセンスに脱帽しました。もちろん、中身も神様との交流を通して自分の本当の気持ちに気付く人たちの変化など心が温かくなる内容なので元気がほしいときはぜひ！</p>		

本のない、絵本屋クッタラ	標野 凧/著	ポプラ社
<p>本のない、絵本屋？とクッタラを訪れるお客さんのように不思議な気持ちで手に取りました。この作品は、店主の広田奏と共同経営の八木が切り盛りする本屋兼カフェ。メニューは季節のスूपセットとコーヒーのみの上に、本が置かれていないという不思議なお店。</p> <p>なぜ、本がないのかについては1話目のオチでその理由に納得し、その設定のユニークさと舞台である北海道にこんなお店が実在したらいいのに、と想像の世界へと案内してくれます。著者が現在東京で現役のカフェ店主をしている経験も食べ物描写などに反映されていて、その作品の雰囲気がついついいつも通うお気に入りのブックカフェを思い出してしまう作品でした。この本が面白かった人は『喫茶ドードー』シリーズや作中にも紹介される人物が主役の『終電前のちよいごはん』などもぜひ楽しんでください。思わず自分のお気に入りのカフェに行ってしまうと思うと思います。</p>		
スイート・ホーム	原田 マハ/ 著	ポプラ社
<p>原田マハさんと言えば、芸術系の小説のイメージが強い人が多いかと思いますが。私もそのイメージの強い一人でした。しかし、偶然手に取ったこの本は違いました。</p> <p>兵庫県宝塚市にある、という設定のケーキ屋さんを舞台にその店を運営している家族や近所の人たちがそれぞれ章ごとに主役となる連作短編小説になります。</p> <p>最初の章では、ケーキ屋さんの長女が梅田の雑貨店で働いているところから始まります。ここから展開するお話が、スイート・ホームというケーキ屋さんへ行けば温かく、優しい空気ごと家にケーキを持ち帰れるような気持ちにさせてくれる点がとても好きです。</p> <p>ぜひ、家族の温かさや何となくケーキを食べたいときに読んでみると原田マハさんの新しい魅力を再発見できる、そう思ってオススメしたい作品です。</p>		
水を縫う	寺地 はるな/ 著	集英社
<p>数か月前に文庫化された作品です。舞台は同じ大阪府内の寝屋川市になります。男の子だけど裁縫が好きな弟、女性だけど女性らしい衣装が苦手な姉、母だけど料理が苦手な母、など以前の性や家族の役割の固定化に悩んでいる家族が姉の結婚式のドレスを自分が作る！と弟が宣言することによって変化していく話です。</p> <p>私自身も妻だから、女の子だから、という言葉にずっと違和感や反発を抱きつつ、でもその世間の枠にはまれない自分に悩んでいました。</p> <p>それをこの本は一人一人の思いや事情に寄り添いつつも枠にはまらなくても、それもいいのだ。お互いが性差などを越え、できること、したいことで補い合って変化していくことができると教えてくれているように感じました。</p>		
グランドシャトー	高殿 円/ 著	文藝春秋
<p>2023年第11回大阪ほんま本大賞を受賞した作品です。私がオススメしたいのは、賞を受賞したから、だけではなくこの作品の舞台が京橋のグランシャトーをモデルに戦後の高度成長期からバブル崩壊後の様子が描かれています。</p> <p>主人公ルーは、訳があって故郷を離れなくてはならず仕事を探します。紆余曲折を経てグランドシャトーで働くのですが、そこのNO.1である真珠をねえさんと慕い二人はともに中崎町の寮で二人暮らしをします。</p> <p>あらすじからずっと京橋の辺りばかり描写されるのかと思っていたらルーは色々な場所へ行き、最後は大好きなねえさんのためにある決断をする。その家族でもなく、友人でもなく、といった不思議な絆で結ばれた二人と二人が見つめてきた京橋の景色を懐かしい、と思う方もきっといると思います。グランドシャトーのCMを覚えている方はぜひ、一度読んでみてください。</p>		
百年の子	古内 一絵/ 著	小学館
<p>『マカン・マラン』シリーズが有名な著者が書いた最新作。学年誌百年の歴史を祖母、母、孫という三代の関係や戦後の編集者の目を通して戦中・戦後にかけて紡がれていきます。</p> <p>この小説は、フィクションですが実際に学年誌などに携わっていた編集の方や小学館に眠る歴代の学年誌を丹念に取材、調査をされて書いたものだと思います。著者自身、何冊も戦争についての著作を出し、どうか後世に伝えておきたい。その思いで作品を書いたとお聞きました。また学年誌は、世界で日本にだけ存在する雑誌だという点でも戦争に反対とか賛成とかという信条に関係なく、なぜ日本にだけ学年誌が生まれたのか、出版社がどのような苦勞をして百年続けてきたのか、そのことを知るためだけに読むという点においても有用な小説だと私はオススメする理由の一つに挙げたいです。</p>		

大阪市立城東図書館

大阪市城東区中央3-5-45 06-6933-0350

<https://www.oml.city.osaka.lg.jp/>